

ウィトゲンシュタインの哲学を 形態学として解き明かす

専修大学 文学部 准教授

古田 徹也

(お問い合わせ先) E-MAIL: furuta@isc.senshu-u.ac.jp



研究の背景

ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン (1889～1951) は、現代の哲学を代表する人物の一人ですが、「純粋に抽象的な問題を扱う英語圏の言語哲学者・論理学者」というイメージが流布しています。しかし、この捉え方は極めて偏ったものです。もっと多面的な文脈の下に置かなければ、彼の議論の中身やその意義を十分に理解することはできません。

本研究では、この認識を出発点に、文化や啓蒙という観点からウィトゲンシュタイン哲学を描き直すことを試みてきました。とりわけ、彼がゲーテ以来のドイツ語圏の学問的・文学的伝統を批判的に継承している点を明確にしていく作業が、本研究の中心になっています。

研究の成果

ウィトゲンシュタインは、ゲーテの形態学の中身とその意義を深く理解し、一面ではその方法論を受け入れています。ただし、他面ではその本質主義的な側面やステティックな枠組みを拒否して、私たちの言語的活動の複雑性やダイナミズムを捉えようと試みています。本研究ではその内実を、先行研究との比較も交えながら解明しました。

その成果の一部は、前年度、論文「形態学としてのウィトゲンシュタイン——ゲーテとの比較において」として公にし、『これからのウィトゲンシュタイン——刷新と応用のための14篇』(荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編

著、リベルタス出版、2016年) に収録しました。また、同年度にはウィトゲンシュタインの最晩年の遺稿集である『ラスト・ライティングス』(古田徹也訳、講談社、2016年) も刊行しましたが、この訳書の至るところにも、本研究の成果が反映されています。

今後の展望

現在は、本研究で浮かび上がってきた「ウィトゲンシュタイン的形態学」の方法論を、現実の具体的な諸問題に応用する研究を進めています。彼は自らの形態学について、人々をいわば「精神的痙攣」から解き放つ役割があると強調しています。その啓蒙的な役割の要点は、人々の言語使用が硬直化して不自由に陥っていることを指摘し、言葉が本来もつ柔軟かつ創造的な可能性を提示してみせることにあります。そうした彼の議論を通して、「言葉を使うことによって思考し、行為し、生活する」という、人間の有り様にとって根本的な特徴となるものを捉え直し、私たちの言語的活動自体をより豊かなものに発展させる手掛かりが見つかるはずです。

関連する科研費

2013-2014年度 研究活動スタート支援「文化と啓蒙の観点を軸とするウィトゲンシュタインの倫理学的解明」

2015-2017年度 若手研究(B)「形態学としてのウィトゲンシュタイン哲学の解明」



2016年12月に開催したシンポジウム「これからのウィトゲンシュタイン——刷新と応用」の一幕



公刊した研究成果(論集『これからのウィトゲンシュタイン』、訳書『ラスト・ライティングス』)